慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　末舛　惠一
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
診療時間―午前9時～午前11時
電話（3353）1211（大代表）

平成16年度大学入学式

安西塾長「三つの宝」を説く

医学部 一〇二名が入学

四月三日、平成十六年度大学入学式が日吉校舎内日吉記念館にて催された。本年度前期の入学者数は八、六七四名であり、医学部は一〇二名、看護医療学部は一〇〇名が入学した。塾長、教職員代表、塾員代表による祝辞、新入生代表による入学の辞が、各々表された。

入学式当日、桜舞う春空の下、日吉の山は入学を迎えた学生やその家族、卒後五十年を記念して招かれた卒業生、更には部活動やサークルの勧誘に気勢を上げる上級生らで久方ぶりの賑わいをみせた。開式の刻に合わせ新入生の背が日吉記念館に消えると、中庭には感慨深げに見護る両親らの姿が残り、やがて三々五々と保護者会場へ向かっていった。

午前十時に開式が宣せられた。まず学事報告として黒田昌裕常任理事より入学者数の発表があった。それによると前期入学者は医学部の一〇二名、看護医療学部の一〇〇名をはじめ、全九学部の入学者数の合計八、六七四名であった。

安西祐一郎塾長より祝辞。続いて常任理事・学部長・学部員吉田主任・塾員代表者の紹介があった。挨拶に立った安西塾長は義塾の新入生に対し「宝」、即ち「よき師・よき友」「新しい自分」「慶應義塾」を探して欲しいということを述べた。つまり「よき師・よき友」としては義塾の半学半教の精神を引き、教師を含めて義塾の一人一人との関係が目

入学式の会場

入学式会場内、卒後50年の招待席

るあり方について触れた後、「宝」で、これから義塾で三つの出すことであり「新しい自分」としては自由の気風を深く有する義塾にあって、新しい自分の新しい力を発見するべく勇気と夢を持ち凛とした態度で、学生生活に望むことを期待し、「慶應義塾」としては建学の精神ともいうべき「立国は私なり、公に非ざるなり」の句（慨我慨の説）を引用し、義塾の支柱ともいうべき独立自尊の理念を誤き納得の上、自分自身の慶應義塾を見出して欲しいことを説き（そして）それらすべては生涯を支える大きな財産になるであろうことが期待出来るとして話を結んだ。

続いて教職員代表として村井純環境情報学部教授、塾員代表として株式会社オリエンタルランド加賀見俊夫代表取締役社長からの祝辞があった。村井環境情報学部教授は半学半教の精神について平易な文言で例を引き解り易く説き、更に挫折を怖れず自信を持って学生生活に望んで欲しいと述べた。加賀見塾員代表はその挨拶の中で独立自尊とは他人を卑しめず自らを卑しらを育てる糧となることを見出すことであり「新しい自分」としては自由の気風を深く有する義塾にあって、新しい自分の新しい力を発見するべく勇気と夢を持ち凛とした態度で、学生生活に望むことを期待し、「慶應義塾」としては建学の精神ともいうべき「立国は私なり、公に非ざるなり」の句（慨我慨の説）を引用し、義塾の支柱ともいうべき独立自尊の理念を誤き納得の上、自分自身の慶應義塾を見出して欲しいことを説き（そして）それらすべては生涯を支える大きな財産になるであろうことが期待出来るとして話を結んだ。

続いて教職員代表として村井純環境情報学部教授、塾員代表として株式会社オリエンタルランド加賀見俊夫代表取締役社長からの祝辞があった。村井環境情報学部教授は半学半教の精神について平易な文言で例を引き解り易く説き、更に挫折を怖れず自信を持って学生生活に望んで欲しいと述べた。加賀見塾員代表はその挨拶の中で独立自尊とは他人を卑しめず自らを卑し

三四会定例理事会

―平成16年3月26日―

報告事項

一、卒業生（83回）謝恩会会長出席と記念品（福澤諭吉全集第一巻）贈呈（目録）
二、赤倉山荘関係、三田各子部教授（26名）に山荘利用勧誘の資料付
三、中村育民（病　18回生）より塾に対し五、二五〇万円遺贈あり
四、三四会定例に関し条文の調査実施の報告

協議事項

一、会則改定案につき調査報告を資料として協議を行うも更に検討を要するとして近日中に臨時理事会を開催し検討する。
二、学部教職員名簿・会報誌の印刷に関し業者を大日本印刷に委託することとする。
三、三四会ホームページに関し現状と将来計画の報告
四、将来計画委員会を近日中に開催予定
五、平成十五年度決算、同十六年度予算につき資料提供と説明あり
六、本年度評議員会に関し説明と支部会を近日中に開催を予定する。
七、陳旧化し故障にても使用不能のパソコン、印刷機各一台廃棄処分を決定し新鋭機器と交換。
八、学部教室数カ所から患者の移送先につきご協力願いたい旨の依頼あり。

臨時理事会

―平成16年4月12日―

協議事項

会則改訂に関し、各役職の選任事項を再度検討する。

教室人事

（教室から連絡の事項）

【外科学教室】
小平　進（消化器外科　42回）
帝京大学教授　退任
横山清七（小児外科　43回）
東海大学教授　退任
―16・3・31―
奥沢星二郎（57回）
佐野厚生病院　副院長（同病院　外科部長）
石山直己（脳外　51回）
平塚市民病院　院長（同院　副院長）
宮沢直人（呼吸外　43回）
平塚市民病院　名誉院長（同院　院長）
加藤木利行（心外　52回）
埼玉医科大学国際医療センター心臓血管外科教授
申　範圭（心外　61回）
東海大学助教授
―16・4・1―
【衛生・公衆衛生学教室】
阿屋浩司（62回）
杏林大学保健学部　公衆衛生学教室　教授
（同学衛生学公衆衛生学教室兼現教授、慶應義塾大学医学部衛生公衆衛生学教室非常勤講師）
―16・4・1―

お願い

教室の人事消息、主催する行事など、三四会員への弘報として適当な事項をお知らせ頂く目的で毎月「連絡表」をお回し致しておりますのでご記入の上ご連絡下さる様お願い申し上げます　編集室

教室主催の行事

（教室から連絡の事項）

【形成外科学教室】
第7回日本組織工学会
一、会長　中島龍夫（教授）
二、会期　七月一～二日
三、会場　（東京）砂防会館
四、担当者　貴志和生
第14回日中形成外科学術交流会
一、会長　中島龍夫（教授）
二、会期　九月十一～十三日
三、会場　（中国）北京
四、北京協和医科大学　形成外科　戚可名教授と共同開催

落穂

今年は冬暖かく桜も三月中旬には咲くのではと一時期予想されたが、予想を裏切り四月に入って開花宣言となった。自然のいとなみを予想することの難しさを思い知らせてくれた。気候の変化をとらえるのが気象学であるが、この学問は基本には経験的な蓄積から先の気候変化を予想するものであり、経験に基づくと言う点では気象学は、医学に通ずるところがある。

ところで今年の春は、全国医学部にとって不安と期待の入り混じった季節になったのではなかろうか。医学部は学部新入生とスーパーローテーションの研修医という二つの新入を迎えることになったからである。特に後者がトピックであることは間違いない。慶應病院では塾卒業生の研修医応募が少なく病院の体制を心配する声もあるが全国医学部いずれも同じ状態でありまあよろしいのではないかと思う。むしろ注意しなければいけないのは、関連病院への応募状況ではないか。臨床研究の義務化は、ありふれた疾患は全て

桜の花とスーパーローテート

の臨床医が診察できるようにという主旨で設定されたカリキュラム的な制度だと考えられている。

大学病院ではありふれた疾病については教科書的に教えられるが、現実にそのような患者さんが来院してきて教育する機関としては元来向いていないのではないだろうか。その理由の一つに、大学病院においては、ありふれた疾病で来院する可能性が低いからである。

また、大学病院は、教育・研究という十字架を背負っており、診療の機軸もそちらにおかれているのが当然であり、ありふれた疾病の研修には基本的にはあまり適当でないと考えられる。むしろ、ここで考えないといけないことは、後期研修にむけて魅力ある状態を今から醸成することが重要ではないだろうか。

慶應の場合、スタッフも優秀であるし、東京に一極集中の経済状況を考えると後期研修医の確保はさほど難しいとは思われないが、そういう状態に甘んじることなく、ファイティングポーズをとって、優秀な後期研修医を確保されるよう望む。（M）

学会名

一、会長名
二、所属
三、会期
四、（開催地）会場

第17回日本脳死・脳蘇生学会
一、上田守三（脳外　47回）
二、東邦大学脳神経外科教授
三、六月五日
四、（東京）都市センターホテル
第58回日本食道学会
一、北島政樹（外　45回）
二、学部長
三、六月二十四～二十五日
四、（東京）赤坂プリンスホテル
第10回日本ヘリコバクター学会
一、北島政樹（外　45回）
二、学部長
三、七月一～二日
四、（東京）京王プラザホテル
第13回日本定位放射線治療学会
一、久保敦司（放　47回）
二、放射線科教授
三、七月十日
四、東京（都市センターホテル）
第11回日本遺伝子診療学会
一、清水信義（分子　特49回）
二、分子生物学教授
三、九月十七～十八日
四、（東京）東京国際交流館
第37回甲状腺外科研究会
一、久保敦司（放　47回）
二、放射線科教授
三、十月十九～二十日
四、東京（京王プラザホテル）

平成十六年度 三四会員が会長担当の定例学術集会

―六月～十月開催の集会―

（担当者又は所属よりの連絡による）

83回生謝恩会開催

平成十六年三月二十四日水曜日、帝国ホテル富士の間にて卒業生である83回生の謝恩会が行われた。猿田前医学部長、北島医学部長の挨拶に引き続き、相川病院長の乾杯で盛大に開かれた。会途中には未外三四会会長、安西塾長のお祝いの言葉をいただき、卒業生は学生最後の会に感激な様子であった。国家試験を二日前に終えたばかりの卒業生は、今までの勉強から開放され、同級生と大いに談笑し、また、お世話になった先生方と歓談を交わしていた。参加された父兄の方々も、ご子息・ご令嬢の医者への旅立ちを心から祝福しているようであった。会では初のマッチング制度の各卒業生の進路報告を兼ねた、両親や先生への感謝の言葉で盛り上がり、最後は大きな円を両親・教員・生徒が作り若き血を熱唱してクライマックスを迎えた。一次会終了後は、卒業生達は意気揚揚と二次会へと移動し、最後の楽しい思い出を作っていたようである。

論壇

甦れ北里精神

―感染症研究者の立場から―

小澤　敦

現在医療の現場には膨大な数の抗菌剤が充満し、これさえあれば細菌感染症は制圧出来るという極めて短絡的な思考が定着しているように思われる。従来から抗菌剤投与と細菌感染症の治療といった等式による物の考え方が拡大していったことが、感染症研究の魅力を喪失させ、感染症研究の進歩を大きく阻害して来た要因であると思う。一九七〇年代以降分子生物学が開花を浴びるようになり、生物学のパラダイムが変貌して研究の流れが遺伝子還元主義的方向へ加速していった。このような流れの中で基礎、臨床医学領域の多くの研究者は、ヒト遺伝子情報の解析、がん遺伝子、分子免疫学などの今日的学問の流れに目を奪われ、感染症研究に対する関心は希薄であったと考える。基礎医学と臨床医学が遊離した方向に進み、講座制という古い体制の中で学問の流行に埋没し、研究至上主義の風潮が生れた。生体と微生物の交渉という中で感染症研究をとらえ、医学教育に情熱を傾けている研究者は極めて少ないように思われる。

我が国の大学医学部を眺める時、感染症研究の専門家を自認している人は多いが、深い思考能力を持った重量感のある微生物病研究者は、基礎、臨床（特に内科、外科）を通じて極めて少ないのが現状であろう。

慶應医学部発足当初においては、北里柴三郎先生を筆頭に北島多一、志賀潔、秦佐八郎、小林六造といった錚々たる微生物病研究の大物教授が連座しており、その重量感、威圧感は全国でも群を抜いていたのである。北里学の基本精神は、基礎、臨床医学が一体化した横断的連携体制の確立にあり、大学での講座制の中に安住している限り、その研究成果を社会に還元する実学的研究は出来ないという考え方が存在している。この精神は〝感染論の父〟として高い評価を受けている北里門下の小林六造先生に強く引き継がれ、小林先生独自の研究哲学が誕生したのである。その名著「簡明臨床細菌学」には先生の奥深い感染、発症論が展開されている。先生は感染とは「微生物と宿主との間に成立する生態学的反応である」という宿主、寄生体関係の先駆的考察を提唱したのである。先生が臨床上の諸問題と細菌学を連結して問題解明の方向を打ち出し、我が国で初めての「臨床細菌学教室」を設け、基礎と臨床が融合し同じ研究室の中で渾然一体となって討論しながら意欲的で活発な感染症研究が推進され、多くの研究実績が蓄積されていったことは歴史的事実が物語っている。一方において、私は基礎、臨床の一体化した感染症研究活動が低下している慶應医学の現状を憂慮している者の一人である。

自然科学においては、Ｈｏｗ（どのようにして）を探求するものであって、Ｗｈｙ（なぜ）という問いかけに答えるものでないということが言われてきた。元来、目的なしに現象が進行して結果が出るという自然科学の領域にあってはＷｈｙに対する答えは必要ないという指摘もある。

赤痢菌やコレラ菌の病原因子の分子遺伝学的研究は推進されて来たが、これらの感染によって、どのようにして（Ｈｏｗ）下痢がおきるかという生化学的な下痢発症の機序は、未だ解明されていないと私は考える。

単一因果律による病原論医学の限界を考える時、微生物生態系を構成する諸因子の相互作用を基本とした生態学的思考方法を駆使した病因論の考察の必要性を訴えたいのである。

単一菌種の追及に溺れ、多菌種共存の法則の解明を忘れて来た従来の微生物学研究は、その新しい姿を将来に求めて行く必要がある。

微生物学、疫学、臨床医学、文化人類学、人類生態学、分子遺伝学、野外生物学などの学際的ネットワークによる高次の感染症研究体制の確立こそが、正に北里＝小林研究哲学の基本理念であり、それによって各専門領域の科学が相互反応し、「新しい生物学」の出現が期待され、同時に研究の重量感が増大していくものであると確信している。そして、学際的研究の推進は専門化の否定に直結しないことを付言しておく。

生命科学の日々まばしい進歩を否定するものではないが、今こそ我々は進歩という幻想から脱却し、「生命とは何か」、「人間とは何か」、「文明とは何か」、といった素朴な問いかけに対して原点に帰って考え直して見ることの重要性を強調したい。伝統ある慶應医学における感染症研究の新しい息吹と、その再生を期待したい。

（東海大学名誉教授　微　28回生）

新入生

（　）は出身校

秋田敬太郎（開成）秋葉和壽（麻布）秋山光治（慶應義塾）朝倉宗徳（慶應義塾志木）浅田祐介（慶應義塾）浅野友梨（渋谷教育学園幕張）東修智（灘）荒井学（開成）飯島茂巽人（開成）五十嵐桂（巣鴨）池田めぐみ（慶應義塾湘南藤沢高等部）石井和典（慶應義塾志木）泉田博彬（筑波大学附属駒場）伊東可寛（慶應義塾）今井俊一（筑波大学附属駒場）内田理瑛（慶應義塾女子）江上将平（慶應義塾）王子富登（栄光学園）大谷利光（東大寺学園）小川亮（慶應義塾ニューヨーク学院高等部）垣本隆行（灘）河西未央（慶應義塾志木）片倉琴美（ノエリス女学院）堅田侑作（帝塚山）金澤徳典（灘）金田和也（慶應義塾）鎌谷尚志（桐朋）釜本大（外国の学校等）木村篤史（栄光学園）清田康弘（白陵）久島雄宇（慶應義塾）清水康史（慶應義塾）倉田貴（城西大学付属川越）田島敬也（慶應義塾）田島佑樹（栄光学園）田中誠（栄光学園）田中諒（巣鴨）田野崚翔（慶應義塾）田村亮太（慶應義塾）筒井絵里沙（慶應義塾湘南藤沢高等部）堤琴介（筑波大学附属）寺坂幸倫（暁星）殿森広将（慶應義塾志木）外山弘文（開成）中大淳平（慶應義塾）中村伸太郎（高田）長島隼人（慶應義塾）新野恵子（慶應義塾女子）額賀里成（海城）関田哲也（慶應義塾）早川真由美（桜蔭）福島彩乃（白百合学園）藤澤大志（富山中部）藤田紘朋（村丘寛和（開成）森禎二郎（開成）森本桂子（膳所）八木一騎（慶應義塾）柳沢亮（慶應義塾）山川輝記（外国の学校等）山根裕介（開成）山本翔一（開成）由良昌大（慶應義塾）吉田剛（栄光学園）四倉正也（開成）渡辺佳恵（慶應義塾湘南藤沢高等部）

岡野栄之教授ゴールド・メダル賞

第10回テクノ・フォーラム21

岡野栄之教授（生　62回）は、東京テクノ・フォーラム21からゴールド・メダル賞を受賞し、去る四月十五日、読売・日本テレビ文化センター内にて記念賞授与式が行われた。受賞の対象となった研究課題は、「成体脳における神経幹細胞の同定、それを用いた中枢神経系の再生に関する研究」。

岡野教授は、一九九〇年代初めに、ショウジョウバエの遺伝学的な研究手法を駆使し、神経発生の新規の制御因子であるRNA結合性蛋白質Musashiを同定した。さらに、この哺乳類相同分子Musashi 1が、神経幹細胞に強く発現する選択的マーカーであることを明らかにした。また、RNA結合性蛋白質であるMusashi 1が、mNumb遺伝子のmRNAの翻訳を抑制することにより、Notchシグナルの活性化を誘導することを介して、神経幹細胞の自己複製能を高めることができることを示した。さらにMusashi 1を指標として、成人脳内にも神経幹細胞が存在することを突き止めた。また、これを発展させて、神経幹細胞を生きたまま光る細胞として可視化・同定し、セルソーターを用いて分離する技術を開発した。この系を用いて中脳腹側部からの神経幹細胞を分離し、この細胞を脳内に移植することによりパーキンソン病モデル動物の機能回復を誘導している。また、慶應義塾大学の整形外科学教室との共同で、世界で初めて脊髄損傷の霊長類モデルを作成し、ヒト神経幹細胞移植による機能回復を確認した成果は、国際的に注目を集めている。同氏のこの一連の研究は、失われた神経細胞の再生により、脳の機能回復をもたらすなど、将来画期的な脳疾患治療法の実現を期待させるものであり、今回の受賞の対象となった。今後、同氏の研究は、神経幹細胞を基軸として、神経発生の研究成果を中枢神経系の再生医学へ結びつけることができるものと期待されている。

その後の学生団体の部室問題

現在、慶應義塾大学医学部には三十余りの学生団体があり、うち部室を有する団体は三分の一に満たない。残る部室を持たない団体の大半は、医学部団体育会に所属する、運動系の団体である。

これら部室を持たない団体の要求に対して、医学部は今から二年以上前に、第二校舎三階に部室を設置するよう、決定した。しかし、該当階に入っている薬理学教室の、総合医科学研究棟への移転が予定通りに進まず、部室問題は宙に浮いた状態が続いていた。今年に入ってからも、一時、既に移転の済んだ部分より部室を設置する動きがあったが、「実験動物に悪影響を与える」との理由により、計画はまたしても中断された。（医学部新聞、一、二月号）度重なる計画の中断に対し、学生の間では、部室の獲得について半ばあきらめにも似た感情が広まっている。また、当問題について、学校側より学生に対するきちんとした説明はなされていなかったが、その後も関係者の話し合いが宙に浮いた状態が続いていた。時間的にもかなり経過し、一以降の段階で解決への目途がつく見通しと伝えられている。（関連記事4面に）

体幹部高精度低侵襲治療

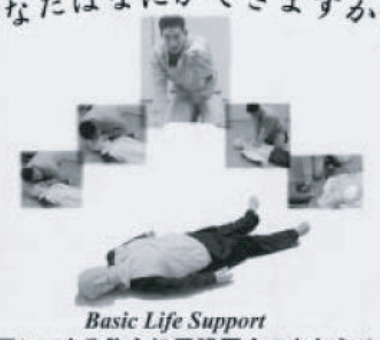
「定位放射線治療」保険収載決まる

定位放射線治療は集光照射、ピンポイント照射などとも、慶應でおこなっているライナックナイフやガンマナイフとして施行されていたが、この四月より体幹部に対しても適用拡大がなされた（同じく六三、〇〇〇点）。これにより、肺や肝臓などの腫瘍に対しても正常組織への影響を少なく保ちながら、非常に高い抗腫瘍効果を得ることができる。早期肺癌の場合には現在の標準治療である手術に匹敵する制御率が期待されており、極めて低い侵襲性から高齢者、手術不能の患者にも適応可能である。

保険収載上の適応は直径五cm程度までの転移のない原発性肺癌、原発性肝癌、他部位のコントロールされた三個までの転移性肺癌、肝臓などである。

通常の放射線治療が五、六週間を要するのに対し一週間以内で治療できること、腫瘍に対しては通常治療の約倍の生物学的線量を投与するのに治療に伴う正常組織の障害がほとんどないこと、が特徴である。（関連記事4面に）

あなたはなにができますか？



Basic Life Support
市民にできる救命処置講習会のお知らせ

- 毎週月・火・木の17～19時、土曜日の15～17時に東校舎1階左クリニカル・シミュレーション・ラボにてBLS（一次救命処置）講習会を開催します。
- 内容：①心肺蘇生法　②窒息の解除　③AED（自動除細動器）
- 対象：信濃町キャンパスで働き、学ぶ方、およびBLS講習を支援してくださる方。三四会員様、大歓迎です。
- 受講料は無料で、受講者には認定証およびバッチを授与します。
- 予約・受講方法
  ①お問い合わせ・ご予約は原則としてメールでお願いします。
  ②メールには氏名、所属、受講希望日を第3希望までご記入ください。
  （1部の受講人数が6名までなので、調整のため第3希望までお願いしたいと存じております）
  ③管理者より受講日の案内が届きます。
  ④受講の際はどくにご用意いただくものはありませんが、動きやすい服装でご参加ください。
- お問い合わせ・ご予約用アドレス　csl_keio@yahoo.co.jp
- クリニカル・シミュレーション・ラボのホームページ
  http://www.csl.keio.ac.jp/csl_web/
  （「シミュレーション・ラボ」で検索することも可能です）

ハワイ・医療セミナー
―日米医学、医療の対比から学ぶ―

私の所属するハワイ大学医学部の医学教育部門(Office of Medical Education,OME)で、このたびの医学医療セミナーを開催することになりましたので、ご案内申しあげます。

日時：6月7日（午前）、8日（午後）、9・10日（全日）
11日（午前）2施設見学

トピックス
1）クリニック体験・見学　6）医療訴訟
2）開業医の生活　7）救急医療
3）病院経営　8）患者を基盤にした診療
4）予防接種　9）医療費
5）施設見学　10）研修医の生活

日本の先生方のために、臨床研修の必修化に伴う、医学教育と医療体系の激変に際して、タイムリーな医療トピックを盛り込んだ医療セミナーをご用意いたしました。セミナーの演者は、いずれも、選りすぐった、その道の権威者ばかりです。講演を日本語で行う演者もおりますが、英語の演者の場合は日本語への通訳が行われます。このセミナーは、病院勤務医、開業医、学部教職員すべての先生に満足していただける内容だと、自認しております。また、先生方のキャリアーや年齢にかかわらず、有用な内容であると思っております。その詳しい内容がホームページ(OME.hawaii.edu)に載る予定ですので、ご覧ください。トピックに関しましては、最終決定までの多少の変更をご容赦ください。

連絡先：3972Old Pali Rd.Honolulu,Hawaii96817
TEL（808）595－7302
E-mail mskipsuzuki@aol.com　鈴木光明（児　41回）
Suzuki,Mitsuaki

問合せ先：〒167－0031
杉並区本天沼2－36－10　桑野研司（外　41回）
TEL　03－5938－5808